

〔書評〕

濱田 敦著

## 『國語史の諸問題』

本書は、浜田敦氏の第四冊目の論文集で、しかもこれが最後の著作と思われるものである。

はじめに、書名について、すこしくあげつらわねばならない。

書名の由来は、大学での長い間の講義題目でもあり、最終講義にもつかったもので、「日本語史」では、「諸問題」との結びつきで熟さないと感じられたとのことである。前の三冊は、『朝鮮資料による日本語研究』(正・続)・『日本語の史的研究』とあって、いずれも「日本語」とあるが、このたびは「国語」となったのである。

ところで、「日本語」か「国語」かについては、問題のあるところ、一部には強力に「日本語」を押し進め、「国語史」はよろしく「日本語史」とすべきであるという考えもあるわけで、語感のようなもので、こういう書名を選ばれたというのではもの足りないのである。評者は、韓国での「国語」が韓国語をさし、中国での「国語」が中国語をさすというのが、漢字文化圏での用法であることをかんがみれば、日本人が「国語」と言えば、「日本語」であり、そこには排他的なもの含まれていないと考えるのである。されば、評者は「国語史」の方に賛するものである。

収載論文は、内容により、次のように四つに分けられている。

福 島 邦 道

## 第一編

- 一 音韻論的解釈
- 二 促音沿革考
- 三 促音と撥音 [附] 紹介
- 四 長音 [附] 日本地理志料開題
- 五 音便——撥音便とウ音便との交錯——
- 六 安達・宇達の「達」について
- 七 釈簡
- 八 犬の遠ぼえ

## 第二編

- 一 万葉集の助動詞
- 二 上代に於ける願望表現について
- 三 上代に於ける希求表現について
- 四 「ます」「います」という語について
- 五 中世の文法

## 第三編

- 一 シナ資料
- 二 魏志倭人伝などに所見の国語語彙に関する二三の問題

三 国語を記載せる明代シナ文献

四 日本風土記山歌註解

五 海東諸国紀に記録された日本の地名等について

六 海行摺載に散見する日本語彙

#### 第四編

一 明治以後における国語音韻史研究

二 新村先生の人と学問

三 新村出全集第二巻解説

四 朝鮮語の先生

五 時枝誠記博士著『現代の国語学』の書評によせて

六 昭和35・36年における国語学の展望国語政策・国語問題

各論文の執筆年時についてみると、最も古いものが昭和一五年で、新しいものは昭和四七年であり、三十年間にわたるものが収められている。ただし、どちらかと言えば、既刊三冊に収められなかったものを集めているので、浜田氏の全論文から見ると、比較的初期のものが多い。ともあれ、全四冊の中で、最も部厚いものとなっていて、浜田氏の学問の特色がよくうかがえる著作と言えるのである。

第一編は、音韻関係のものである。

さて、評者が、著者をのりこえて、収載論文の可否について云々することは、いかがと難ぜられるむきもあろうが、論文自体すでに発表されたものは、研究者の目にふれ、独り歩きをしているので、それについて論じなければならぬ。

「あとがき」(木田章義)には、

ただし、この著作集に再録しなかった若干の音韻論関係の論文は、論争の過程のなかで、音韻・音声・音節・単位などの問題を

体系的に整理しようとしたものであるが、氏はこれを途中で放棄された。(五六八ページ)「圈点は評者による」

とあり、「この著作集からもみずからの判断で削られた。」とされている。

このことは、書評以前の問題ではあるが、とりあげなくてはならない。

第一編で、収められているのは、直接、論争の種となった、一番はじめの「音韻論的解釈」だけである。

これに対して、服部四郎「音韻論(三)」(本誌第二九輯)があり、よく知られている。

浜田氏は論文の「補記」で、亀井孝「室町時代末期の $\phi$ に関するおぼえがき」における浜田批判への返答のつもりで記したとされているが、評者は服部氏に批判された論文としての意義が大きいと見ている。

なお、亀井論文も、服部「音韻論(二)」(本誌第二六輯)において批判されており、このあたり、三氏の論争は複雑にからみあっている。

ところで、割愛された論文は、「国語国文」に掲載のもの五編と次のものがある。

1 「音韻体系」(『現代国語学II』昭和三二年二月)

2 「音韻論的語について」(『音声学研究I』昭和三六年)

1は、服部音韻論に対し、浜田氏の独自の「作業原則」を立てて論を展開したもので、講座物のせいもあり、ほかの難解なものにくらべて、比較的わかりやすい記述になっている。2は、「言語論」と同じものだが、京大グループの音声研究の一環としてだされたところに意義がある。

そもそも、論争というものが、不毛であつたかいなかは、当事者  
はもとより、傍観者にもわかに判断のくだしにくいところがあり、  
時日を仮して、両論をくらべることににより、判明してくることもあ  
るのであり、「論のための論」と独り決めすることは容認できない。  
音韻の研究には理論をとめない、特に、浜田氏の音韻論は、通時論  
的立場に立つた考え方なので、国語史研究に益する点が多いのであ  
る。

もとより、浜田氏のものにくらべて、服部氏のは、海彼の理  
論を消化した、メカニスティクなものである。しかし、服部氏のも  
のとて、所詮日本人のものであり、そのまま欧米の理論に取り入れ  
られるようなものではない。服部氏自身、その「作業原則」につい  
ての英文論文の反響をめぐって、

世を挙げて distinctive feature (弁別特徴) のみを問題とする世  
の中で人の注意をひくはずがなと思つている。(『新版音韻論と正  
書法』(一九七九、三五〇ページ))

と言われているのである。なお、「弁別特徴」とは、R・ヤーコブソ  
ンと M・ハレによつて考えだされたものであり、ハレと言えば、生  
成音韻論になつてくる。

この第一編では、「促音と撥音」および「長音」が量質ともにすぐ  
れ、本書の中でも圧巻となつている。昭和二四年から二六年にかけ  
て執筆されたもので、当時、このようなテーマで、広く深く論じた  
ものはほかになく、未開の野にはじめて歎を入れたかの感が深い。

浜田氏は、「音韻論の立場」(『国語教室』6 昭和三年二月)の中  
で、音韻の学問のたち後れていたことについて、

少くとも私の学んだ京都大学の国語国文学科で、音韻に関する

講義が行われる様になつたのはやつと昭和十年代になつてからの  
ことだったので。

と言われているが、そういう中から、音韻研究者としての面目躍如  
たる、このような二労作がでてきたのである。

両論文とも、日本語に固有なものについてであるが、それらの音  
声的な事情をくわしくさぐるとともに、歴史的な立場からその説明  
を試みているのである。

「促音」も「撥音」も、正確に英訳できない、日本だけの術語で  
あるが、それらが起こる事例をあらゆる場合にあたつてしらべ、ま  
た、それらを豊富な資料によつて裏付けたものである。すなわち、  
両音は今日ほぼ対立した音として受けとられてはいるが、表記上はい  
ろいろな混乱状態もあり、その実態が歴史的にはじめて明らかにさ  
れたのである。

同様に、「長音」もまた日本的なもので、Long Vowel などと訳せ  
るが、その実態は日本語に特有な現象である。長音が起り得る事  
例をやはりくわしくしらべ、それらを資料によつて究めようとした  
ものである。「長音」だけでも、五〇ページにわたる長論文となつて  
いる。

両論文は、このように研究史上に重い位置を占めるのであるが、  
近時、この方面の研究は、新資料の発掘、考証の厳密化にともない、  
それらの一々の事例について、さらに正確かつ確かなものが見出さ  
れるようになってきているのである。こうして、部分的に訂正を要  
するところがでてはいるが、論文の持つ視野の広さ、考察の鋭さな  
どの点から考えると、その価値は毫も減じていないのである。

ただ、浜田氏自身の音韻論の進展により、自ら訂正するところは

でている。たとえば、「長音」について、その「補記」(二四〇ページ)に、一部の考え方を撤回するところもあり、もう一つの「長音」(「統朝鮮資料による日本語研究」)を参照せざるを得なくなり、著作集がこれだけですまされないという難をともなっているのである。一貫した著作集として編まれなかったためである。

なお、目次に「附」紹介とあるのは、三ページほどの短い埋め草のようなものであるが、G・ヴェンク氏の「Japanische Phonetik, Bd. IV.」のはじめでの紹介である。この「日本語音声学」——日本語音変化の諸現象と音問題(一九五九)は、日本語音韻史の研究上、まれに見る大著である。評者は、この紹介により、西ドイツの有数の日本学者と相識り、爾後親交を保っている。ヴェンク氏は、ここ数年、「和泉式部日記」(一九七九)、「誹風未摘花」(一九八三)、「仁勢物語」(一九八五)についての言語学的観察をほどこした著述をなし、さらに「論文集」(一九八七)をだしている。しかし、ドイツ語で書かれているため、日本ではほとんど知られていない。

第二編は、主に万葉集の語法についてである。はじめの「万葉集の助動詞」は、「万葉集大成(言語編)(佐伯梅友編)」に載せられたものである。それからあらぬか、全般的に「万葉語研究」(昭和一三年)がよく引用されている。

ところで、評者は、この書の再刊(昭和三八年)にあたり、万葉の語法をよく知りたいという心組みで、微力をつくしたことであった。しかし、さる事情があり、そういう熱もいささか冷めてしまった現在、第二編についての批評はひかえさせていただく。

第三編は、浜田氏が、京大研究室において、永年その影印本刊行に努力された、それらの資料についての論文が重きをなしている。

浜田氏の事業については、評者も若干の協力もしているので、その御苦労がよくわかるのである。

六つの論文の中で、評者は「日本風土記山歌註解」(「京大文学部五十周年記念論集」)に強心のかきかれるものがある。

山歌とは、日本の俗謡のようなものをさすが、その一つ一つについては、その後、さらに精密な考証もできており、国内資料との対比などにおいて、あきたらない点も見受けられよう。しかしながら、明版「日本風土記」全体の中から、この山歌をとりあげ、国語史研究資料として意義を克明にのべていて、今まで敬遠されがちだった中国資料を、国語史、特に音韻史の資料として真正面から論じたものである。

浜田氏の「日本風土記」の研究は、昭和一四年の卒業論文からはじまり、約二十年後に影印本となり、この論文となったのである。

この「日本風土記」については、中国でも研究が進められ、汪向榮・嚴大中校注「日本考」(一九八三)もでているが、残念ながら、京大影印本には気づかれていない。なお、浜田氏以後の「日本風土記」の研究については、渡辺三男「新修譯註日本考」(昭和六〇年)に評者による「解説追考」があることを付記しておきたい。

この中国の影印資料の総決算が『纂輯日本訳語』(昭和四三年)であり、それに付されたのが「シナ資料」である。

これは、中国資料が、ローマ字やハンダールの資料と異なり、漢字で記されているという特性について、ほかの資料とくらべ、解説しがたいところのある反面、単音表記のものより、ほんとうの日本語を表記していることを道破したものである。キリシタン一辺倒に対する警鐘もこめられていよう。

ところで、評者は「中国」とし、浜田氏は「シナ」とすることに  
ついて、取りあげておこななくてはならない。

浜田氏の「シナ」は、その第一冊目の著作から用いているもので  
ある。戦前は、「支那」と記し、「シナ」と呼ぶことは普通であった  
が、今は国際的にもそんな呼称はほとんど用いないのである。

そういう「シナ」という呼称に愛着を持ちつつける学者もいられ  
る。亀井孝『日本語学のために』『日本語系統論のみち』の「再刷に  
あたりて」には、再刷本では、「シナ」をほかの言い方に変えたが、  
それは嗜まぬこととされ、この問題を鋭く論じている。

「シナ」の呼称を好むこと、たまたま、東西の学者、その軌を一  
にするわけで、明治の気骨をも感じ取られるのである(ちなみに、浜  
田氏は明治より一年あとのお生まれである)。

中国資料の最古のものとして、「魏志倭人伝」の固有名詞があげら  
れている。

これらの固有名詞は(CV)の形をとり、日本語としての特徴は持つ  
ているが、国語史の中で、こういう文献以前のものが、果して歴史  
的な資料となり得るかどうかについては、評者はいささか疑問をい  
だしているのである。尾崎雄二郎氏は、「倭人伝」についてくわしい  
研究をされ、小川環樹氏もその書評(『文学』四九一四、昭和五六年四月)  
で一読をすすめられているが、「邪馬臺國について」の中で、「倭人  
伝」の資料性について、論争している人々は、半ばは専門以外の領  
域に属しているとされ、

しかし何と云ってもこれは漢文史料であり、とくに國學者諸氏  
において、手にあまる部分がある、と私には見受けられる。(『中国  
語音韻史の研究』三〇六ページ)

と言われているが、国語史研究者には手に負えないところが多すぎ  
るようである。

次に、中国資料と関連するもので、朝鮮漢字音によって表記され  
た資料として、中世の「海東諸国紀」および近世の「海行摺載」に  
ついて、くわしい解説と考察とがなされている。

このような朝鮮資料にまで及ばれるというところに並々ならぬ意  
欲が感じとられる。なお、「海東諸国紀」のハンブルの部分には、早く  
から気づかれていたのである。ただ、浜田氏より前にこれを国語史  
の研究に援用しようとした学者があり、それが次の書である。

橋本進吉『国語史の研究』(信濃木崎夏期大学 昭和十一年)〔著作  
集に未再録〕

ハ行音の歴史についてのべているが、その中で、次のように言っ  
ている。

それからもう一つ、これも室町時代の略中頃で、朝鮮人が日本  
の事をかいた、「海東諸国紀」といふ本の中に——これは諺文でな  
く漢字でかいてあるが——日本人の名前を万葉がな式にかいたも  
のがある。彦四郎、彦九郎、太郎、次郎などの名を日本流にかいた  
やうな漢字でかくのではなく、漢字でかいてそれを朝鮮の字音で  
よめば、日本語の発音の様によるのである。彦九郎のひに比、  
はに破がかいてある。(八五ページ)

以下、朝鮮漢字音から当時の日本語の発音をくわしく考察してい  
る。

橋本氏のあげられた例は、本書の四六九、四七〇ページに見える  
もので、その音価についての研究は、一段とくわしいものになっ  
ているのである。なお、この解説は、実際に、音韻史の資料として利

用されており、「長音」(『統朝鮮資料による日本語研究』二一四ページ)、「撥音と濁音との相関性の問題」(『日本語の史的研究』七五ページ)などに見られる。ただ、その解説方法には評者と考えを異にするところもある。

橋本・浜田の系列を示したが、橋本氏は、「日本風土記山歌」にも関心が深く、藤田徳太郎「閑吟集附狂言小歌集・室町小歌拾遺集」(岩波文庫昭和七年)にも、その成果について、「橋本進吉氏の御示教を受け」「多大の益を受ける」(二一四ページ)とあるように、早くから、国語史学における中国・朝鮮資料の重要性を察知されていたのである。

最近、村井章介「老松堂日本行録——朝鮮使節の見た中世日本——」(岩波文庫 昭和六二年三月)がでたが、この資料についても、すでに浜田氏の言及(四四七ページ)があり、拙稿(『国語と国文学』昭和五八年二月)もあり、浜田氏の研究の射程は広い。

第四編は、雑録であり、国語史にはかかわらないものもある。中で、おどろくべきものは、追悼特輯にのせられた「新村先生の人と学問」である。この文には、普通の追悼の気持と、学者としてのあり方についての所懐とが併存しており、恩師に対しても批判がなされているのである。

ちなみに、『美意延年(新村出追悼文集)』(昭和五六年)には、浜田氏の追悼文が三種のせられており、この文は「節録」となっている。

「朝鮮語の先生」は、浜田氏の学問的エッセイで、評者の最も心惹かれるものである。

崔在翊『朝鮮語の先生』が父君の書架にあり、実際に学んだのは崔漢儉であることや朝鮮に行つて本格的に勉強したかったことが記されている。実はこの文の前に、「あのころのことども——美しくかつ

た慶州の晩秋——」という文があり、「昭和十六年の秋、母と二人で二度目に朝鮮を訪れた」ことが感動的にのべられている。ストイックな浜田氏の別の素顔をかいま見るのである。

浜田氏の一連の著作の大きな特色は、それぞれに必ず「索引」が付されていて、その読解に便宜を与えていることである。ただし、このたびの「索引」には若干の誤植がある。たとえば、「女真語」が「にょ」と読まれているが、こういう言語がわかるのが新村出「東方言語史叢考」(四一、九五、九九ページ参照)以来の伝統の学風だからである。

終りに、浜田氏は、京大退官とともに、自ら本学会評議員は辞められたが、学会を見つめるまなざしには今もきびしいもののあることを付言しておきたい。

(昭和六十一年五月二十二日発行 和泉書院刊 A5判 五七一ページ 一五〇〇円)

#### 〔追記〕

第三編の三は、浜田氏の処女論文で、石田幹之助氏に高く評価されたもので、その論文は、『東亞文化史叢考』(昭和四八年)に収められている。なお、石田氏の書にある「至元訳語」は、服部四郎「アルタイ諸言語の研究I」(昭和六一年、四〇〇ページ)に引用されている。

服部・浜田両氏とも、中国資料により、専門の言語を研究することでは、くしくも一致している。

——実践女子大学教授——

(昭和六十二年四月二十日 受理)